

シュメールの宇宙から飛来した神々④

WHEN TIME BEGAN



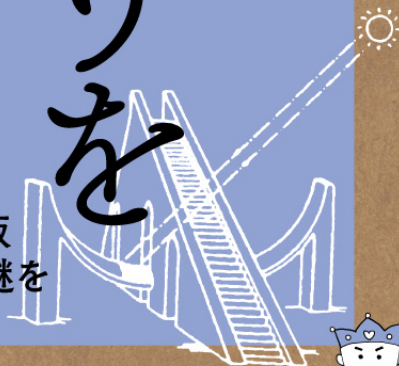
ゼカリア・シツチン
竹内慧「訳」



彼らはなぜ 時間の始まりを 設定したのか



『宇宙人はなぜ人類に
地球を与えたのか』待望の新装版
高度な人工的産物オーパーツの謎を
一挙に解明する迫真の論考



ヒカルランド

訳者まえがき

私たちは、ふだん、なにげなく、時間と空間の中に住んでいる。

「いま、あなたのまわりの時間と空間は、どうなっていますか？」と聞かれたでしょう。あなたは、手もとの新聞をみて、

「そうか、今日は1月14日の日曜日、もう1996年になっていて、明日は成人の日で休みだな」と思うだろう。そして、ふと、まわりを見渡すと、この本を取り出したあとにぽっかりとあいた本棚の空間が妙に気になるかもしれない。

しかし、実際の時間は、あなたの部屋から外へひろがり、広大な宇宙の天体がいまも、不気味に脈を打ちながら、それぞれの時を刻み、果てしない空間をかけめぐっている。

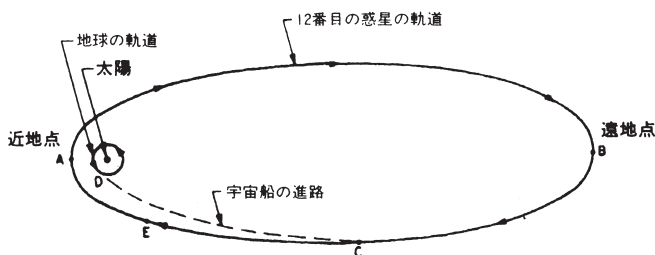
「古代より、人類は空を見上げてきた……」と始まるこの本を読んでいくと、古代の人たちが時間も空間も一緒に動いている宇宙から、どのようにして地球の時間を学びとったかが解ってくるはず

だ。その時間を測る「石のコンピュータ」ストーンヘンジは、最新の「現代のコンピュータ」による分析でも、その驚くべき複雑さが明らかにされた。また、炭素同位体による年代測定からも、それが旧石器時代がようやく終わった頃に建造されたことがわかっている。一体、誰がその時代に、これほど精巧なものをつくることができたのか？　ピラミッドにも、各地の段階式神殿にも、同じ様な謎が満ちあふれている。

こうした古代の謎を、現代の科学の目でみるおもしろさが、この本にはある。

この本の著者ゼカリア・シッチン氏は、粘土板に刻まれたシュメール語を解読できる、数少ない言語学者で考古学者でもある。彼は、シュメールとエジプトの多数の古文書を自分で分析し、さらに古代メソポタミアから有史前のコロンビアに到る遺跡の数々を調査し、その研究成果を現代の科学の目を通して検証しながら、論理的な説明を提示してくれる。

彼の著作の多くは、全米でベストセラーになり、世界各国でも翻訳されているにもかかわらず、その内容が、神話学、考古学、古代史、天文学、物理学、数学、分子生物学と驚くほど多岐にわたっているため、「幻の宇宙考古学本」として、一部の人々にだけ知られていた。ゼカリア・シッチン氏の「地球年代記シリーズ」の『地球人類を誕生させた遺伝子超実験』（ヒカルランド）／『人類を創成した宇宙人』（徳間書店）（原題：The 12th Planet）が、はじめての完訳版として発刊されたが、今回の『彼らはなぜ時間の始まりを設定したのか』は、そのシリーズの真打ち登場という感じで密度の濃い内容となっている。



シュメール歴代の神々の在位期間は、大体3600の倍数となることから、神々は第12惑星の周期が、地球に近づいた時に行き来していた！

古代メソポタミアの古文書には、太陽と月を含めた太陽系の11惑星の他に、謎の12番目の惑星の存在が記録されている。この惑星は地球にやってきたとされている宇宙人アヌンナキの故郷であり、現在でも宇宙のかなたにあり、3600年周期で太陽のまわりを回っているのだ。著者シツチンの提唱する「第12惑星」は、現代天文学のホットな話題の一つである「惑星X」と同一視することができ、天文学者たちはこの未発見の惑星の探索を日夜続けている。

アヌンナキとは、古代のシュメール語で「天から地球に来た者」を意味する。

第12惑星から最初に地球に派遣されたアヌンナキたちのリーダーは、科学者エンキで、「地球の神」として、遺伝子工学によって人類をつくった。またノアの洪水のときは、人間に方舟の作り方を教えて、人類を絶滅から救った。

後から来た異母弟のエンリルは、「神の司令官」として、600名のアヌンナキたちを統括していた。

シツチンの説で興味深いのは、彼らアヌンナキたちが巨人で

あることだ。生物物理学によれば、生物の時間感覚は、からだの大きさと密接に関連しており、からだが大きくなれば寿命も伸びる。無論、その関係は単純な比例関係ではないが、巨人アヌンナキたちの寿命が人間の寿命より長いことは確かである。古代の人々は、周期が地球の3600倍の星からやってきた、不老不死にみえるアヌンナキたちを、神々としてあがめたのかも知れない。

この本がとりあげている謎はたくさんある。その中のいくつかをあげてみよう。

▼時間は誰が、何のために、何時^{いつ}きめたのか？

▼それがなぜ1年365日（うるう年366日）で、1週間7日、1日24時間になったのか？

▼16世紀に、はじめて発見された天王星、海王星、冥王星のことを、どうして古代人が知っていたのか？

▼3600年周期の12番目の惑星は、ほんとうに1000年後にあらわれるのか？

▼この12番目の惑星上の生物の寿命は、1年周期の地球上の生命の寿命より長いのか？

▼「石のコンピュータ」ストーンヘンジは、石器時代の人たちにつくれたか？

▼春分点向きと夏至点向きの両タイプの段階式神殿を、古代の人たちはどうしてつくれたのか？

▼遠い昔に、地球上に発達した頭脳があったのか？

▼それは、古文書に記録されている、宇宙からやってきたアヌナキたちだったのか？
▼地球上の文明発展の周期、3600年は、12番目の惑星からやってくるとされるアヌナキたちと関係があるのか？

▼これから、時間はどうなるか？

さあ、それでは、まえおきはこれくらいにして、地球年代記シリーズの『彼らはなぜ時間の始まりを設定したのか』をじっくりと楽しんでいただくとしよう。

グリニッジビレッジの寓居にて

竹内慧

シユメールの宇宙から
飛来した神々④

彼らはなぜ時間の始まりを設定したのか
WHEN TIME BEGAN

目次

第Ⅰ部

宇宙意識の飛躍に向け、 プログラムされた存在が人類である

第1章 宇宙の波動から地球の時間を導きだした者

21

第2章 石のコンピュータ・ストーンヘンジに仕組まれた宇宙時間の全貌

57

第3章 古代神殿はストーンヘンジと同じ原理でつくられていた！

90

第Ⅱ部

第12惑星の超知性体アヌンナキを 知れば時間の謎すべてが解ける！

第4章 スターゲート——宇宙への扉はシュメール神殿に実在していた！

125

第5章 あらゆる秘密を保持してきた者が、今も地上に存在する

160

第6章 地上のモニュメントはすべて、聖なる建築家——宇宙人が創造した

201

第Ⅲ部

第12惑星の足跡は こうして古代遺跡に刻まれている!!

第7章 地球の聖地シユメールになぜストーンヘンジが建てられたのか

243

第8章 カレンダー・暦は人類を奴隷として扱ったための道具だった!

277

第9章 アメリカ新大陸の鉱物資源に目をつけた第12惑星の飛来者

312

第10章 アヌンナキの計画に従って人類は民族大移動を繰り返してきた

346

第Ⅳ部

第12惑星からの訪問者たちによる 古代核戦争の超真相

第11章 宇宙人アヌンナキを二分した地球全面戦争勃発!

389

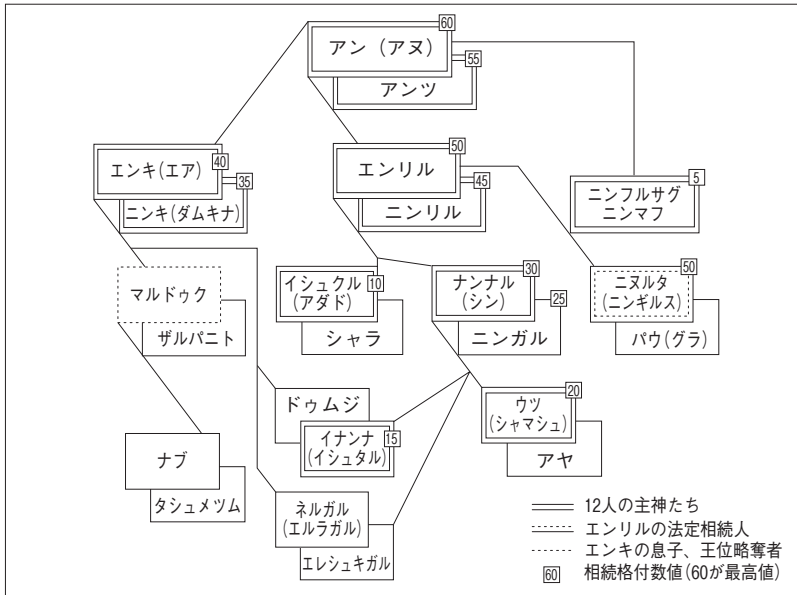
第12章 牡羊座の時代、核兵器の死の灰によってシユメールは滅亡した

421

第13章 第12惑星が播いた文明の種子は、ふたたび地球で開花する

466

人類を創成した「宇宙からの神々」の系図

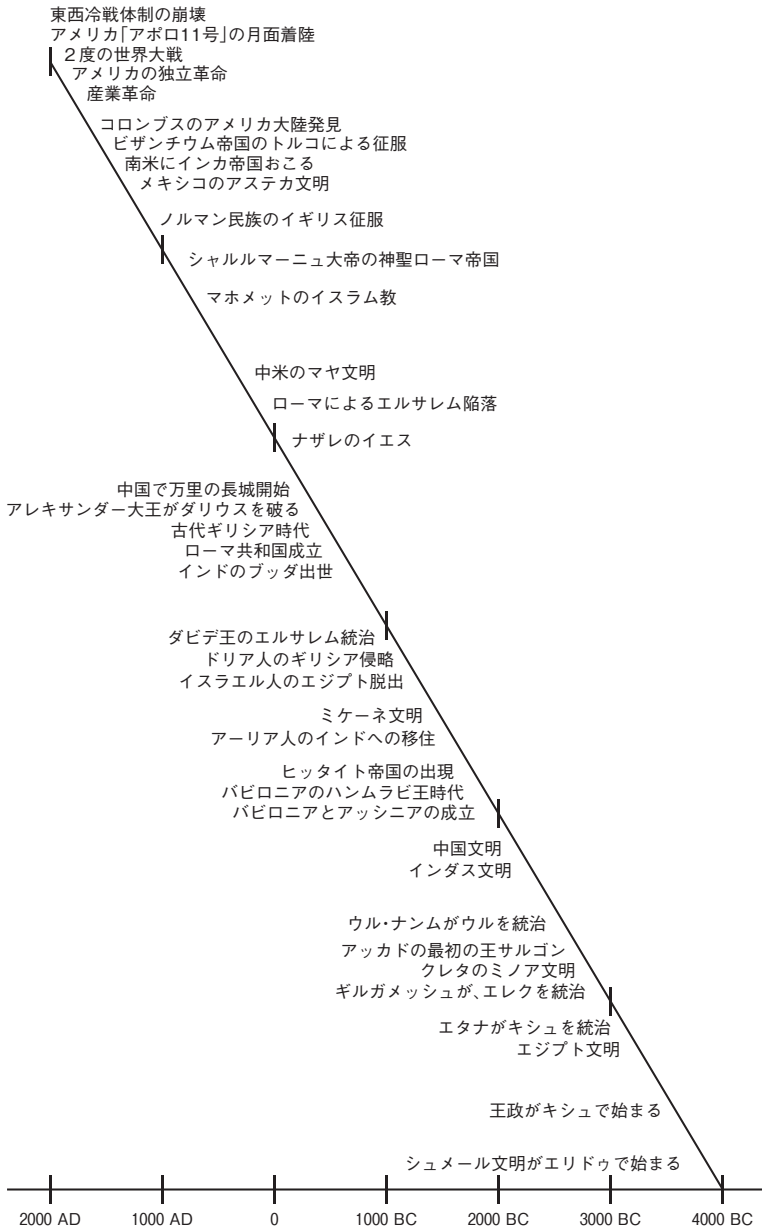


シュメールの神々の父は天神アン（アヌ）で、その息子に地神エンリルと水神で智の神エンキ（別名エア）がいる。エンリルの子に月神ナンナル（愛称ナンナ）と太陽神ウツがあり、エンキの息子が後のバビロニアの主神マルドゥクである。ナンナルからは金星神で愛の神イナンナが生まれた。これら神々の集団を総称で「ネフィリムまたはアヌナキ（労働の神々）」と呼ぶ。個々の神々の呼び名は、場所や時代によっても変化し、アッカド人（アッシリア、バビロニア）は、アヌ、シン、シャマシュ、イシュタルなどの呼び名を使っている。

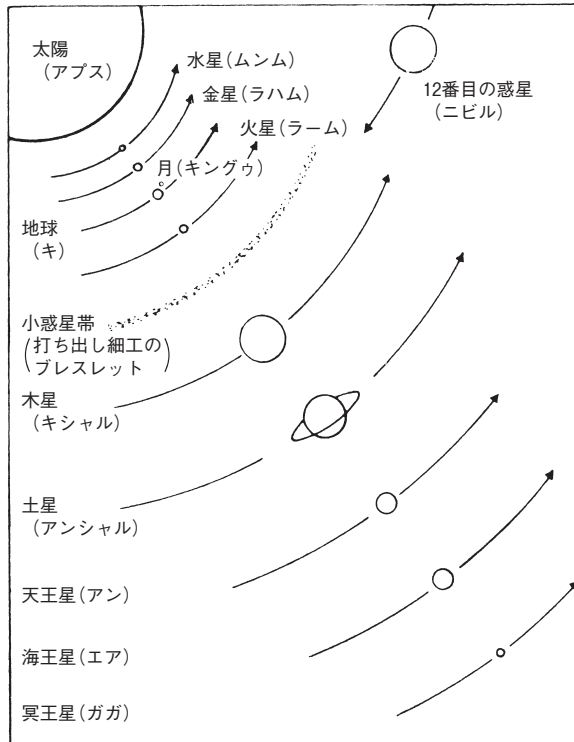
「宇宙からの神々」による人類創成史

(年 代)	(出 来 事)
44万5000年前	・ ネフィリムがエンキ（エア）に導かれ、第12惑星より地球に降り立った。エリドゥ 8（地球第1基地）が南メソポタミアに建設された。
43万年前	・ 大きな氷の広がり小さくなり始める。近東の地域では良い気候が続いた。
41万5000年前	・ エンキが内陸を踏査し、ラルサをつくった。
40万年前	・ 長期の間氷河期が地球規模で広がった。エンリルが地球に到着し、ニップールに派遣団司令センターをつくった。 エンキが南アフリカに行く海路をひらいた。
36万年前	・ ネフィリムが金属を溶解し精製するための冶金工場を建設した。 シッパールをはじめとする神々の都市に、宇宙港がつくられた。
30万年前	・ アムンナキの反乱。人ー原始人がエンキとニンフルサグによってつくられた。
25万年前	・ 初期のホモ・サピエンスが多数、大陸へ移住した。
20万年前	・ 新氷河期の間、地球上の生命が後退した。
10万年前	・ 気候が再び暖かくなり始めた。 神々の子たちは人間の娘を妻に迎えた。
7万7000年前	・ 聖なる親から生まれた人間ウバルツツとラメクがシュルツパクで、ニンフルサグの庇護の下、統治を始めた。
7万5000年前	・ 地球受難の時代ー新氷河期が始まった。退化した人間が地球を放浪していた。
4万9000年前	・ 忠実な下僕ジウストラ（ノア）の統治が始まった。
3万8000年前	・ 7期間も続いた過酷な気候で人が死に始めた。 ヨーロッパのネアンデルタール人は滅び、クロマニヨン人だけが近東の地域で生き延びた。 エンリルが人間を抹殺しようとした。
1万3000年前	・ ネフィリムは、第12惑星の接近が引き金となる洪水が来る事を知っていながら、人間には知らせず、滅亡させてしまおうと誓った。 大洪水が地球を襲い、氷河期が突然終わった。

その後の人類史

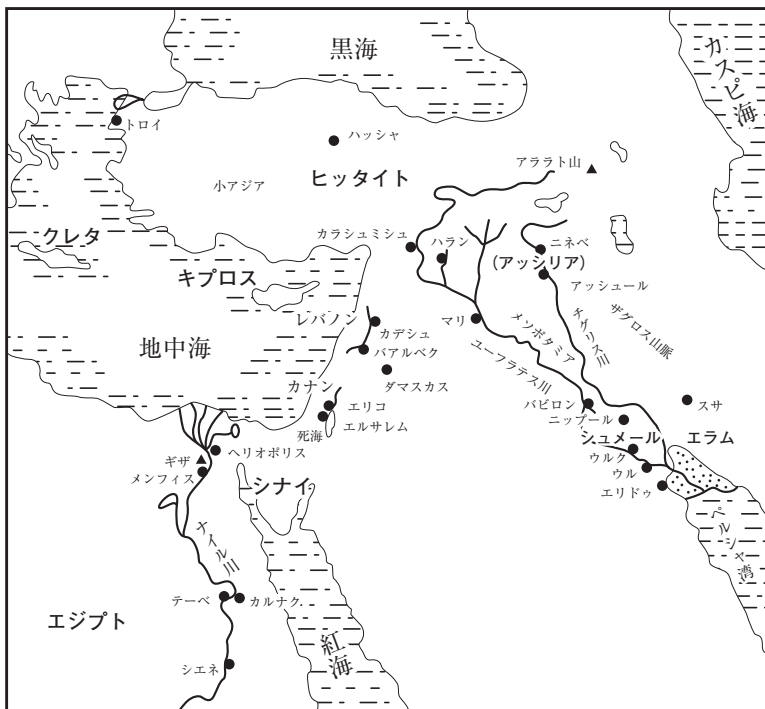


太陽系と第12惑星

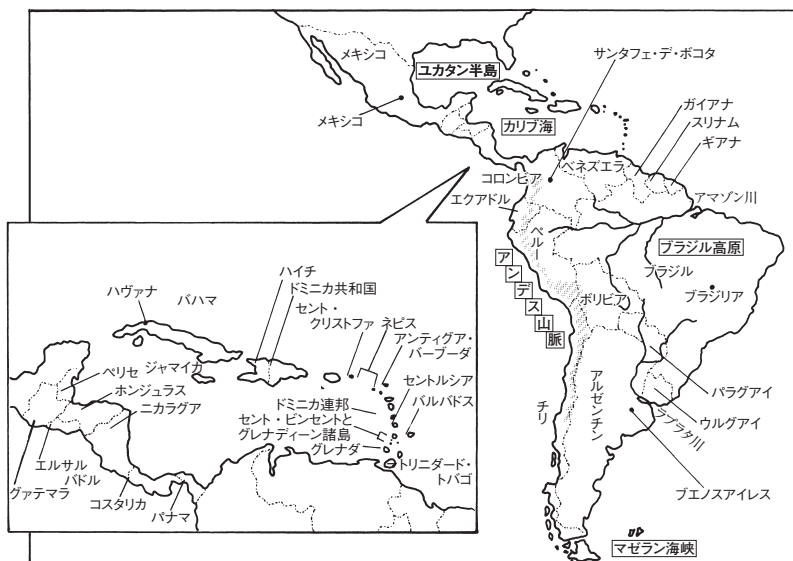


太陽系の惑星と太陽と月の位置関係を図式的に表わしたもので、縮尺は正確ではない。九つの惑星と太陽と月のほかに「12番目の惑星」(古代神々の故郷)が出ているが、この惑星は公転周期が3600年で、離心率も大きく、現在は太陽から遠く離れている。この惑星が、次回、太陽に接近するのは、今から千年以上も未来の紀元3300年頃と思われる。古代シュメール人は、太陽系の恒星と惑星を区別していなかったので、本書でも「12番目の惑星」あるいは「第12惑星」と呼んでいるが、現在の常識的な呼び方では、「10番目の惑星」あるいは「惑星 X」である。

「宇宙からの神々」が降り立った古代メソポタミア



「宇宙からの神々」の痕跡を遺す中米・南米大陸



序 文

古代より、人類は空を見上げてきた。恐れおののきつつ、魅せられたように、人類は天の道を学んできた。星々の位置、月と太陽の周期、傾いた地球の回転などの現象は、どのように始まり、どのように終わるのだろうか。

天と地が交わる地平線上で、夜の星々が消え去り、太陽の光線がとって代わるのを人類はじっと見てきた。そしてついに、昼の時間と夜の時間が等しくなる瞬間を一つの基準として選んだ。

春分・秋分の日である。

その時から人間は暦の助けをかりて、地球の時間を数えるようになった。星々のきらめく空を判別するために、天は十二に区分された。

天球十二宮である。

しかし時がたつにつれて、位置を定められたはずの星々は、必ずしもその場所に固定されてはい

ないように思えてきた。春（秋）分の日、新年の日は、十二宮の一つから別の一つの方へ、ずれていくことがわかってきた。こうして地球の時間に「天体の時間」が加えられることになったのだ。ニューエイジ（新しい時代）の始まりである。

私たちはまさにニューエイジの入口にさしかかっている。そして、ある春分の日、太陽が、過去2000年間あがってきた双魚宮さうぎょからではなく、宝瓶宮ほうびん（アクエリアス）から昇ってくるとき、いったい何が起こるのだろうか。吉か凶か、新しい始まりか、それともすべての終わりか。

未来を知ろうとすれば、過去を調べなければならない。

人類は、地球の時間を数えはじめたときから、すでに天体の時間を測るすべを知っていた。つまりニューエイジの到来を予想していたのだ。古代シュメール、古代エジプト、古代アメリカ、ストーンヘンジをめぐる考古天文学は、時間のまったただ中にいる、今の私たちに大きな教訓を与えてくれることだろう。

第I部

宇宙意識の飛躍に向け、
プログラムされた存在が人類である

第1章 宇宙の波動から地球の時間を導きだした者

聖アウグスティヌス（紀元354年—430年）は、新約聖書とギリシャ哲学のプラトン主義の融合をはかったキリスト教会の偉大な思想家である。彼は「時とは何か？」と聞かれたとき、こう答えたという。

「もし、誰も私にたずねないなら、私はそれが何であるかを知っている」

「だが、それをたずねた人に説明しようとする、何であるかわからなくなる」と。

時間は、地球とその上にあるすべてのものにとって基本的なものである。そして、私たちひとりひとりにとって固有のものである。私たちは生まれた瞬間から、死の瞬間まで、それを画するものはそれぞれの時間であることを経験している。私たちは時間そのものについては、よく知らないが、それを測る方法は見つけてきたのだ。私たちは自分の寿命を年数で数えているが、よく考えてみると、それは軌道の周期を数えているのと同じことになる。地球上の1年とは、私たちの惑星、地球

が太陽を1周する時間と同じだからだ。

私たちは、時間が何であるかを知らないまま、それを測っているが、このことから様々な疑問が生じてくる。もし私たちが、もっと長い「年」を持っている別の惑星で生活しているとすれば、私たちはもっと長く生きられるのだろうか？　そして私たちのライフサイクルも今と違ったものになるのだろうか？　もし私たちが非常に長い年の惑星に住んでいるとすれば、「不死」の世界へ近づけるのだろうか？　エジプトの王ファラオたちは、永遠の来世を信じ、長い年の惑星で神々と一緒になれば、不死の命を持てると思っていたが、実際にそうなるだろうか？　実際には、私たちと同じような惑星は他にあるのだろうか？　他にもっと進化した生命のある惑星があるのだろうか？　あるいは、私たちの惑星のシステムは他に類のないもので、地球上の生命が唯一のものであり、私たち人類は全く孤立しているのだろうか？　ファラオたちは、そのピラミッド文書で言い伝えられていることを、ほんとうに知っていたのか？

「空を見上げ、星を数えよ」と神ヤハウエは、ユダヤ人の先祖アブラハムとあの有名な契約を結んだときに伝えた。こうして人間は、はるか昔より、空を見続けてきた。そして、他の惑星上にも、人間と同じような生命が存在するかどうか、疑問を持ちつづけてきた。理論的、数学的な確率から言えば、その答えはイエスである。ついに1991年に、はじめて、天文学者たちは、宇宙のはるかかなたにある惑星が私たちのとは違う太陽のまわりに軌道をえがいているのを発見したのだ。

この1991年7月の発見は、完全に正確なものではなかった。5年以上も観測を繰り返してきたイギリスの天文学者のチームが、次のような結論を発表した。パルサー1829—10と呼ばれる

光速回転の星が地球の10倍も大きい「惑星の仲間」をつれているというものだった。パルサー1829―10は、何らかの理由によって崩壊した、極度に濃密な星の中心部分に存在していると推測された。そして狂ったように回転しながら、毎秒何回も電波の輻射エネルギーを放出していた。こうしたパルスは電波望遠鏡でとらえられる。こうした周期的な波動を検出して、天文学者たちは、パルサー1829―10のまわりを回っている、ある一つの惑星の周期が6カ月であることも確かめた。だが、このイギリスの天文学者たちは、数カ月後に、彼らの計算が不正確だったとして、その3万光年も遠くにあるパルサーが惑星の衛星を伴っているという仮説をひっこめてしまった。

しかしそれからしばらくして、今度はアメリカのチームがずっと近いところにある似たようなパルサーを発見した。地球からわずか1300光年のところにあるPSR 1257+12と名づけられた崩壊した太陽がそれだった。それは、1億年前に爆発したもので、二つないしは三つの周回する惑星を伴っていた。はっきり確認できた二つの惑星は、私たちの太陽系の水星と太陽の距離とほぼ同じくらいの距離をおいて、自分たちの太陽を回っていた。そして、多分存在していそうな三つ目の惑星は、ちょうど、太陽系の地球と太陽の距離と同じくらいの距離で、自分の太陽を回っていると思われる。

「この発見は、惑星のシステムは宇宙で一般的に見られるというだけでなく、異なった環境下でも存在し得ることを示すものである」と、ジョン・ノーブル・ウィルフォードは1992年1月9日付けのニューヨーク・タイムズに書いている。彼はこう続けている。「パルサーを回る惑星が、即、生命の存在へのカギとはならないまでも、こうした発見は天文学者たちを刺激したことは事実だ。」

今年の秋には、地球外生命存在のきざしを求めて、組織的な天体観測が始められようとしている」。こうしてみると、エジプトのファラオたちは正しかったのだろうか？

実は、ファラオとピラミッド文書の時代よりずっと前、人類の初めて文明として知られるある古代文明の時代に進んだ宇宙論が存在していた。6000年前の古代シュメールでは、1990年代に天文学者たちが発見したことが、すでに知られていたのだ。私たちの太陽系の仕組み（いちばん遠い惑星の存在を含めた）はもちろんのこと、宇宙には、別の太陽系があり、その星々（太陽）は崩壊したり爆発したりすることも知っていたのだ。更にその惑星は、軌道から投げ出されることもあり、生命もこのようにして一つの太陽系から他の太陽系へ運ばれるということも知っていた。

その知識は宇宙論の詳細な内容にわたったもので、記述にも残されている。ある長い文書は、七つの平板に記されたもので、後期バビロニアの訳文として伝わったものである。「創世記」と呼ばれるこの文書は、エヌマ・エリシュという言葉で始まっている。この叙事詩は、春の第1日に当たるニッサンと呼ばれる月の第1日から始まる新年のお祭りの間に、公に読まれたものである。

その内容は、私たちの太陽系が生まれた過程を記述したものだ。その長い文書では次のようなことが述べられている。どのようにして太陽（アプス）とその使徒水星（ムンム）が初めてティアマトと呼ばれる古い惑星のそばで出会ったか。金星、火星（ラハムとラフム）の2惑星は、太陽とティアマトの間にどのようにして落ち着いたか。その後、木星と土星（キシャルとアンシャル）および、天王星と海王星（アヌとエアヘヌディムッド）の二つのペアーがどのようにして加わったか、などである。

ここで注目すべきは、天王星と海王星という二つの惑星はそれぞれ1781年と1930年までは、天文学によっても、その存在がわからなかったという事実である。それなのに、シュメール人たちはすでにその存在を知っており、記述にも残されていることになる。

こうして、新しく創造された「天の神々」（天体）は互いに強くひっぱりあって、衛星、つまり小さい月が生まれた。ティアマトは、この定着した惑星の中央にいて、11の衛星をつくったという。その一つが「キングウ」で、「天の神」そのものに似てくるほど大きく成長した。

現代の天文学者たちは、ガリレオが天体望遠鏡で木星の四つの月を発見するまで、一つの惑星がたくさん月を持つことができるという可能性を知らなかった。しかし、シュメール人たちは、この現象をすでに知っていたのだ。古代の「創世記」によれば、こうして軌道が定められた太陽系の中へ、外部宇宙の侵入者、つまり他の惑星がとびこんできたという。その惑星は、私たちの太陽「アプス」の仲間として創られたものではなく、どこか別の星の仲間だったが、投げ出されて宇宙をさまよっていたのだという。

現代天文学者たちがパルサーや崩壊する星々のありさまを知るずっと前にシュメールの宇宙創造論では、他の惑星系の存在を予測し、崩壊し爆発する星がその惑星を軌道からほうり出す現象を知っていたのだ。創世記のはじめには、こうして投げ出された惑星の一つが、私たちの太陽系の外縁に近づき、その中央部へ引き寄せられていく状況が記されている（Fig. 1）。

その惑星が、外側の諸惑星のそばを通過するにつれ、今でも天文学の大きな謎とされている様々な変わった現象が起きた。例えば、天王星が横倒しになって自転していることや海王星最大の月で

あるトリトンの逆行する軌道、あるいはまた、海王星の公転軌道の内側にまで入ってしまう冥王星の変則的な公転軌道、などである。この侵入者が太陽系の中心に引き寄せられるに従い、ティアマトと衝突するコースにのっていった。そして「天の戦い」が始まった。何回もの衝突で、侵入者である衛星は、繰り返しティアマトに突っ込んでいった。ティアマトは、二つに割れた。その片割れの一つは粉々になり、その破片がアステロイド帯（火星と木星の間にある小惑星帯）を形づくった。もう一つの片割れは、破壊をまぬがれて、そっくりそのまま回転軌道にのり、私たちが地球（シュメール語ではキ）と呼んでいる惑星になった。その時、ティアマトの最も大きい衛星がその軌道のわきへそれて、地球の月になったという。

侵入した惑星そのものは、太陽をめぐる永久軌道にのり、私たちの太陽系の12番目のメンバーになったと言われている（太陽と月と10の惑星で12になる）。シュメール人は、この12番目の惑星をニビル（横切る惑星）と名づけた。バビロニア人はそれを、彼らの国の神にちなんでマルドゥクと呼ぶことにした。古代の叙事詩によれば、こうした「天の戦い」の真つ最中に、ニビルが他のどこからか、「生命の種」を地球にもたらしたとされている。

宇宙をじっくり研究して、現代の宇宙創造説を提起した哲学者や科学者たちも「時」そのものについて、議論を繰り返してきた。時とは、それ自体、一つの次元を表すものなのか？ そして、それは宇宙でただ一つの共通の長さを持つものなのだろうか？ 時は前へ進むだけのものか、あるいは後へ進むこともあるのか？ 現在は過去の一部分なのか、あるいは未来の始まりなのか？ そして、つまるところ、時には始まりがあるのだろうか？ もしそうなら、終わりもあるのだろうか？

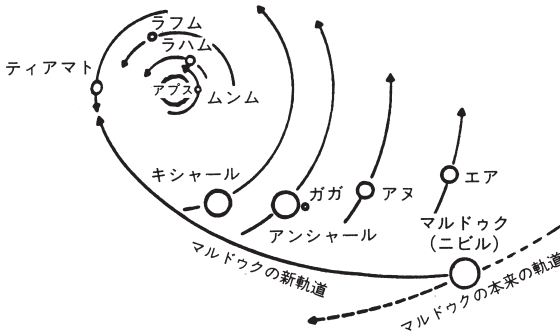
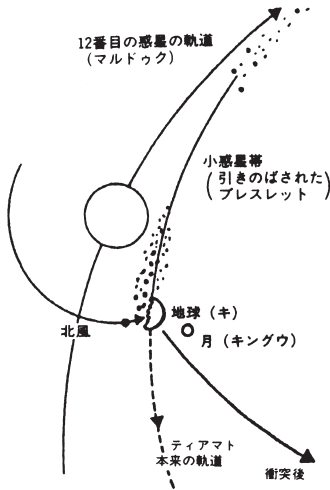


Fig. 1

太陽系に時計回りで入ってきたマルドゥク。土星と木星の引力と磁力の作用により本来の軌道より内側に曲がっていった。



地球と小惑星の創造は、マルドゥクの衛星（北風）と稲妻がティアマトを二つに分けたことから起こった。壊れたティアマトの上半分が、地球となったのである。

もし宇宙が始まりも終わりもなく永遠に続いてきたものならば、時にも、また始まりも終わりもないのだろうか？ あるいはまた、多くの宇宙物理学者が言っているように、「ビッグバン」によって宇宙が始まったのだろうか？ その場合には、宇宙が始まったときに、時も始まったのか？ 驚くべきことには、すでにシュメールの宇宙創造論は、はっきりと「始まり」があったと推論している（そうなければ無情にも、終わりがあることにもなる）。シュメール人は時を一つの尺度だと考えていた。宇宙の歴史は時間によって測られ、刻まれていくのだという。古代叙事詩「創世記」は「時」を表すエヌマという言葉で始まっていることから、このことがわかる。

その時、高い天空は、まだ名づけられていなかった
そして下の大地（地球）も名づけられていなかった

天空には、アプスとその生みの親ムシムとティアマトしか存在しなかった最初の段階を研究するには、大変な科学知識が必要だったに違いない。しかもその時には、地球さえも存在してなかったのだ。

宇宙や太陽系が創造されたときに起きたとされるビッグバンも、まだ地球やその上のものすべてに影響を与えておらず、「天の戦い」だけが起きていた、そんな時のことをよく想像できたものだ。まさしく、こうした瞬間に地球の時が始まったのだ。その瞬間とは、ティアマトの半分が分裂してアステロイド帯となり、地球が自分の新しい回転軌道を回り始めたときのことだ。その時から

「時」を測るために、年を、月を、日を、夜を、数え始めたのだ。

古代の宇宙論や宗教、数学の主流となったこうした科学的洞察は「創世記」以外のシュメールの古文書に多く残されている。学者たちが「エンキと世界秩序の神秘」と題している一つの古文書が存在する。それはシュメールの科学を司る神エンキの自叙伝だが、その時の瞬間、つまり地球の時がカチカチと刻まれ始めたときをこううたっている。

はるか昔の日々に

天は地球より分かれた

はるか昔の夜に

天は地球から分かれた

シュメールの粘土板に刻まれた他の古文書にも、時の始まりの様子が繰り返し述べられている。そこには、この決定的な出来事が起きる前には現れなかった、進化や文明発生の様子が記されている。その前までは……と古文書は続いている。「人間の名前もまだつけられていなかったし、必要なものもまだ存在しなかった」と。すべての発展は「天が地球から分かれ、地球が天からはっきり分離された後で」始まったという。

シュメールの文明に続いて発生したエジプトの古文書にも、当然、「時の始まり」の同じような状況が記されている。ピラミッド文書には、事々の始まりについて次のように記述されている。

天がまだ存在していなかったときに

人間もまだいなかったときに

神々もまだおられなかったときに

死もまだ世に存在しなかったときに

古代では一般的になっていたこうした見解は、シュメールの宇宙論にその端を発するが、ヘブライ聖書の最初の版、創造の叙事詩の冒頭にもこううたわれている。

初めに

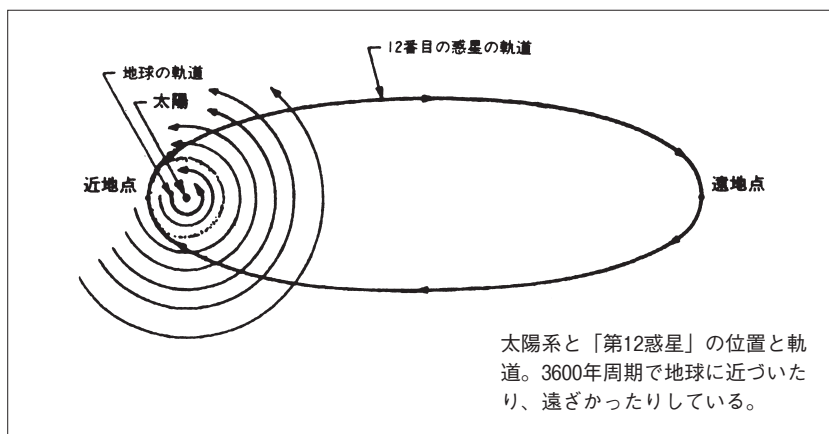
神エロヒムは天と地を創造した

そして地は形をなさず、実体はなかった

そして暗黒がテホンの上をおおっていた

そして神の風がその水面になびいた

今では、この天地創造の聖書の伝えは、エヌマ・エリシュのようなメソポタミアの古文書がもとであることがわかっている。テホンとはティアマトを意味し、風とは、シュメール語で衛星を意味し、天とは「叩き出されたブレスレット」つまりアステロイド帯を表している。聖書には、地球の



始まりがもつとはつきりと記述されている。聖書の訳文は、メソポタミアの宇宙創造論がある時点だけからしか取り上げない。その時点とは、ティアマトの衝突の結果、地球がシャマーム、叩き出されたブレスレットから分かれたときからである。地球にとって「時」は、まさしく「天の戦い」とともに始まったのだ。

メソポタミアの天地創造の神話は、私たちの太陽系が形成されたところから始まっている。ニビル／マルドゥクが、まだ惑星の軌道が決まらず不安定なときに現れたと語っている。私たちの太陽系の現在の姿は、ニビル／マルドゥクによるところが多い。太陽系の各惑星（天の神）は決められた場所を与えられ、軌道と周期と衛星を与えられたのだ。事実、他の惑星をすべて取り囲むように、自分の軌道を回転する大きな一つの惑星、天を横切り、くまなくあたりを調べたこの惑星こそが、太陽系を形成した原動力だったのだ。

彼はニビルの場所を定めた

天のつながりを決めるために
それぞれすべてが、長くもなく、短くもなく

彼はすべての惑星の聖なる天空を定めた
そして、それぞれの惑星の道を保たせ
それぞれの進路を定めた

このようにエヌマ・エリシュにはうたわれている。「彼が天と地を創造した」。これと同じような言葉が聖書の創世記にも登場する。天の戦いはティアマトを古い太陽系のメンバーからはずした。その半分を新しい軌道にのせて、地球を創った。新しい太陽系の重要な構成要員としての月もつくった。冥王星にも独立した軌道を与えた。そして、私たちの天球の新体制として、12番目のメンバーにニビルを加えたという。地球やそこに生をうけるものにとって、こうした出来事が「時」を定める要因になったのだ。

この12番目の惑星がシュメールの科学と日常生活に果たした大きな役割は、今日に至るまで、ずっと長い間、私たちに影響を与えている。シュメール人は1日（日の出から次の日の出まで）を12の「2重時間」に分けた。それは、そのまま12時間を刻む時計や、1日24時間として「現代の時」にひきつがれている。古代の天体図十二宮と同じように、私たちの1年もいまだに12カ月に分かれている。この宇宙からきた数字は、まだ他にいろいろな形で使われている。イスラエルの十二